東出発1勝 気仙沼向洋

震災で練習不足も昨夏準Vの底力

△気仙沼向洋・黒川V（5）5回1死満塁、斉藤の二ゴロ敵失の間に二走・三浦が気迫の生還（5）逆転に沸く気仙沼向洋ベンチ（撮影・高橋　雄二）

◆宮城

▽1回戦（東北福祉大）

黒川	0	0	0	1	1	0	0	0	2
気仙沼向洋	1	0	0	0	0	0	0	0	1

（黒）鳳沢―奥山
（気）斉藤、高橋―後藤、小林

一気5点で逆転

大粒の汗が流れ、目には涙が光る。こんな瞬間を待っていた。全てを乗り越えてつかんだ夏の勝利。気仙沼向洋ナインが整列すると、応援団は涙で拍手を送った。

「いろんな思いが伝わってきて…大きな1勝だと思います」。川村桂史監督は感慨深げだ。

「命をもらった」

3月11日。巨大津波に学校もグラウンドも野球用具も奪われた。練習中だったナインは川村監督の指示で5キ先にある寺まで走った。学校に残った川村監督は校舎の屋上に避難。4階まで達した津波に一瞬、死を覚悟するほどだった。「生きてよかった。命をもらいました」。三浦主将の言葉は全員の本音だ。

練習が再開できたのは4月22日。学校は壊滅状態のため、近隣の本吉響高のグラウンドを借りて時間差で練習。流された野球用具は支援物資に助けられた。練習不足は明らかだったが、昨夏宮城大会決勝で仙台育英に大敗した借りを返そうと個々に工夫。だから苦境にも慌てなかった。1点を追う5回1死一、二塁から三浦主将が三塁前へ絶妙のバント安打。佐藤雅の押し出し四球で追いつき、敵失と那須の右翼線三塁打で一挙5点を奪った。いろんな経験をしてたくましくなった」。川村監督は諦めず、つないで勝ったナインを褒めた。

右肘痛を押して6回2失点と力投したエース斉藤の父・仁さん（62）は言う。「みんな津波から逃げたんじゃない。津波に勝ってきたんだ」。スタンドには「航跡、永久に」ののぼりが揺れる。気仙沼向洋の今夏の航跡はまだ続いていく。

（秋村　誠人）

▽昨夏宮城大会の気仙沼向洋快進撃VTR　7月11日の1回戦で先発の吉田が古川学園相手に1―0完封。勢いに乗ると2、3、4回戦を勝ち上がり、準々決勝の仙台東戦は2―1で9回サヨナラ勝ち。準決勝は小山宜の本塁打などで強豪・東北に6―5で競り勝って初の決勝進出。しかし決勝は仙台育英に1―28と記録的な大敗を喫した。

迷わない 言い訳しない 前へ進む「覚悟」

熱中甲子園　地方大会編

栗山英樹（スポーツキヤスタ）

気仙沼向洋の戦いぶりに見えたのは「覚悟」の二文字だった。迷うことなく、失敗にも言い訳はしない。「これが自分たちの野球だ」というものを最後までやり抜き、そして勝ちきった。

甚大な津波の被害を乗り越えてきた。ただ、それで野球がうまくなるわけではない。序盤の走塁ミスや守りの乱れは練習不足、実戦不足が大きな原因。素晴らしいのはミスに言い訳せず、浮足立たず、自分たちの野球を貫いたことだ。

逆転した5回。1死満塁で2番・佐藤雅選手が同点の押し出し四球を選んだ。普通なら打って出たい場面。その打ち気を抑え、四球を取りにいって取った。一度もバットを振らずにフルカウントへ持ち込み、ひたすら見極めることに徹して四球を選んだ。「何としてもつなぐんだ」。つなぐために自分を殺す覚悟で得た四球は、一挙5点につながる。流れを決めた四球と言っていい。

昨夏の快進撃で「諦めなければできる」ことを見せた。津波に大きな経験が迷わずに前へ進む「覚悟」を生んだのだろう。気仙沼向洋のたくましさはそこにある。（テレビ朝日系「熱闘甲子園」ナビゲーター）

練習場所借りる 本吉響の分まで

○…気仙沼向洋ナインは試合終了後、グラウンドを借りて合同練習も行っている本吉響の応援に直行した。東北福祉大野球場からバスで仙台市民球場へ移動。川村監督は「本吉響さんには本当にお世話になってる。今はもう同じチームと思ってます」と話し、1回戦に臨む仲間へ声援を送った。試合は大河原商に5―8で敗戦。ナインは本吉響の分まで進撃をあらためて誓った。

南三陸に希望の勝利

◆宮城

▽1回戦（Kスタ宮城）

志津川	0	0	1	4	0	0	0	2	0
岩ケ崎	0	0	0	0	2	0	1	0	0

（志）佐藤祐、三浦晃
（岩）大立目、栗原、大立目、菅原大、菅原達

△宮城志津川▽東日本大震災で壊滅的な被害を受けた地元の南三陸町に希望の1勝を届けた。高台にある同校グラウンドに建てられた仮設住宅で暮らす約30人も応援に駆けつけた中、2年連続の初戦突破。百々（どうどう）智之監督は「避難所の方はグラウンドを使って悪いなと言うけど、誰も悪くない。期待に応えられて良かった」と目を潤ませた。

震災の影響で部員5人が転校。5番で出場した阿部も一時は仙台東に転校していた。6月12日の仙台西―志津川の練習試合を観戦し「心の底からまた野球をやりたいと思った」と再転校。今大会の選手登録期限前日の6月21日に登録。背番号20で仲間とともに出場した元4番は「ようやくチームの一員になれた」と無安打にも笑顔を見せた。

震災当日は津波を恐れず、近隣の高齢者ら40人も救助した志津川ナイン。地元の期待を背負い、13日の次戦でセンバツ出場の東北に挑む。（東尾　洋樹）

地震で3試合中断

○…午前9時57分に三陸沖を震源とする震度4の地震があり、宮城大会は3試合で試合中断などの影響が出た。Kスタ宮城では中新田―仙台南戦の4回表1死一、二塁の場面で地震が発生して3分間中断。マウンドにいた仙台南・片岡は「場内アナウンスで知りました。揺れはあまり感じなかった」と振り返った。片岡は東日本大震災で宮城県亘理町の自宅が全壊し、中学時代の同級生も亡くしている。「同級生の分も、といいが強くなって踏ん張れた」と向けの勝利を喜んだ。

NYタイムズが高田高を特集

本紙企画「復興へのプレーボール」で連載している岩手・高田高校野球部が、10日付の米紙ニューヨーク・タイムズで紹介された。「試合に癒やす力」と題する記事では夏の甲子園を目指し、他校のグラウンドで練習に励むナインの様子をスポーツ面で描写。「練習を見る限り（選手の様子は）震災前と変わらないが、自宅に戻ると落ち込む生徒がいると思うと心配だ」とする佐々木明志（あきし）監督の談話や、陸前高田の復興を進めるために甲子園を目指したい」という大和田主将のコメントも紹介している。

また、東北では津波の直接的な被害を受けた場所とそうでない場所の状況は大きく違うが、どちらの地域の学校でも野球が選手や監督らには津波に襲われる前の日常を取り戻す1つの手段になってきたと指摘している。

1勝軌跡「報ステ」で

○…栗山氏は6月中旬に宮城・気仙沼を訪れて、取材した。津波によって無残な廃墟と化した学校も取材。「とてもグラウンドだったとは思えない状況。水たまりには魚が泳いでいた」と振り返る。そんな被災状況からチームを立て直してきた気仙沼向洋。見事な夏の勝利を挙げた試合を取材した模様はきょう11日のテレビ朝日「報道ステーション」のスポーツコーナーで放送される。

〈〈〈